

2017年 年頭挨拶



飛躍の年に向けて

NPO日本朗読文化協会 理事長 城所ひとみ

“春は名のみ風の寒さや” 早春賦のとおり、この季節は春を待つ心ですが、年で一番寒い季節ですね。

昨年来NPO日本朗読文化協会は抜本的に見直しをし、さらなる発展のために検討会を進めており、今年はいよいよそれを実行するという大きな転換期をむかえることとなります。創立16年、「朗読の日」も15回目という節目の時期

にふさわしい飛躍の年となるようにしていきたいと思っております。理事会、運営委員会、タスクフォース（協会の明日を考える会）が一枚岩となり、皆様の大好きな朗読をより楽しめる、居心地の良い、NPO日本朗読文化協会に入って良かったと思っただけの協会を目指して、会員の皆様とともに作り上げていきたいと思っております。朗読が大好きな方が集まり、自分達の為に自分たちで朗読会や、イベントを作り上げるという原点にもどりましょう。皆様に参加をしてくれ、このNPO日本朗読文化協会の意義がありますので、是非ともいろいろな機会に積極的なご参加をおまちしております。



「NPO日本朗読文化協会」は誰かの仕事で15年間動いてきた。

NPO日本朗読文化協会 監事 伊澤逸平

私たちの協会は頭にNPOの冠を抱いている。朗読とNPOはどこで結びつくのかピンとこない。結びつけること自体至難の技と思いがちだが、そんなに難しいことではない。まず、しっかり心をこめて朗読をする。聞いて下さる方々の心に何か少しくも届けばそれでいい。これで定款に掲げる「朗読の普及」は十分に果たしたことになる。しかし、ここにプラスアルファが

欲しい。舞台に立ち朗読をするにはそれを支える裏方の仕事がある。会員の誰かが知恵を出し、汗を流した結果、幕が上がる。いわゆるボランティア活動であり、無償の行為である。しかし、ボランティア活動の本質は「自発性」といわれる。どうやらNPOには「言い出しっぺの法則」というのがあるらしい。企業組織のように上司の命令や誰かの指示で動くのではない。自ら思ったことを仲間の合意を得ながら自発的に行動する。NPO組織はこの歯車が回った時に成立する。

会員は協会のお客様ではなく、協会活動に賛同した人々の集まりであり、会費は協会への支援金と私は考えたい。

第9回 朗読アラカルト



「第9回朗読アラカルト」は2016年12月7日(水)高輪区民センターで開催されました。今年は土日に会場が取れず、平日開催のためか、お客様は昨年より少なめの約150名でしたが、様々なジャンルの作品、プロの演出・音響・照明による見ごたえ聴きごたえのある舞台に、心から満足されていたようです。(皆さんお上手ですねえ、という感嘆の声も！)

今回初めて、協会員だけでなく、協会の講座を受講されている非会員も出演可能としたことで、数名の非会員の方が出演され、より「アラカルト」なプログラムになったのではないのでしょうか。

また、これまでアラカルトを演出されてきた飯田輝雄氏が病氣療養中のため、急遽倉田ひさし氏に演出をお願いすることになりました。突然のこととかなりご苦労されたと思いますが、当日まで様々な点において細やかな配慮をしてくださり、出演者は安心して本番に臨むことが出来たと思います。そして飯島晶子先生にも、本読み時のご指導から何かとお世話になりました。お二人には心から感謝致します。

さて今回、当日のお手伝いを公募したところ予想以上のお申し出があり、日頃顔を合わすことの少ない会員と一緒に活動できる貴重な機会になったのではないかと思います。出演者・スタッフ・当日お手伝いの皆さん、客席から応援してくださった方々、アラカルトを成功に導いてくださった皆様、本当にありがとうございました。

最後に、出演者として、スタッフとして、お客様として…朗読アラカルトの楽しみ方は様々です。次回はどんな形でも、朗読アラカルトをご一緒にお楽しみください。(実行委員長 中村悦子)



「朗読アラカルト」初参加、Aページ、トップバッター。「はい」と合図をもらってステージに、落ち着いて読めたのか、少し早口だったような気もするし…反省しながら舞台袖に入ると大先輩たちが笑顔で迎えてくださいました。ドキドキしながら舞台に立って、ワ

クワクワしながら自分以外の出演者の朗読も聴かせていただきました。「朗読」の奥の深さを実感し、とても有意義な一日となりました。「さて、今度は何を讀もうかな～ 聴き手の想像力を大切に朗読を」と次回に向かって気持ちが動いています。(永井悦子)



本読みの指導の先生、演出家からの確かな意見を頂き、又当日も舞台の出入り、立ち位置等、諸先輩から優しく指導を頂き、落ち着いて読む事が出来ました。楽しい時間を有り難うございました。(新関惇子)